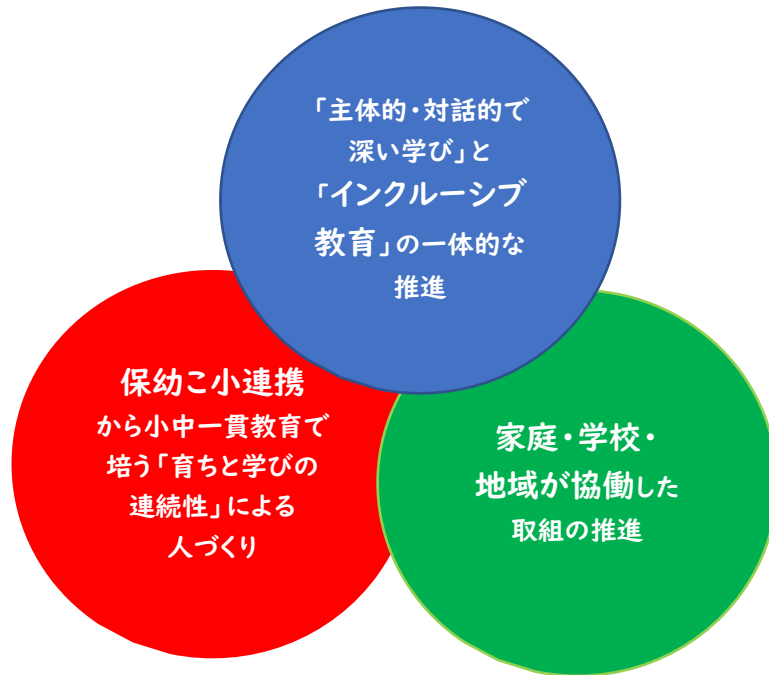


宇治市の小中一貫教育 12 年間の検証を踏まえた

宇治市の小中一貫教育 今後の展望



子どもと子ども、
子どもと教職員、
教職員と教職員、
地域と学校をつなぎ、
育ちと学びの絆が深まる宇治市の小中一貫教育
「つながりとふれ合いの中で愛情や信頼を感じ、
たくましく、仲間と高め合う宇治市の子ども」
の育成

令和8年3月
宇治市教育委員会

目次

○ 今後の展望 3つの柱・12年間の検証 6つの項目・7つの目標	・ ・ ・ ・	1
○ 12年間の検証 成果と課題	・ ・ ・ ・	2
○ 今後の展望	・ ・ ・ ・	3
○ 具体的な取組	・ ・ ・ ・	6



今後の展望 3つの柱

- I 「主体的・対話的で深い学び」と「インクルーシブ教育」の一体的な推進
 - 1 系統的・継続的な学習指導
 - 2 宇治学
 - 6 教職員連携
- II 幼児こ小連携から小中一貫教育で培う「育ちと学びの連続性」による人づくり
 - 3 系統的・継続的な生徒指導と児童生徒への理解
 - 4 児童生徒交流
 - 6 教職員連携
- III 家庭・学校・地域が協働した取組の推進
 - 5 家庭・学校・地域が一体となった教育環境
 - 6 教職員連携

12年間の検証 6つの項目

(令和6・7年度～)

- 1 系統的・継続的な学習指導

9年間を見通した系統的・継続的な学習指導による児童生徒の学習意欲の向上や学習習慣の確立と確かな学力の育成（目標①）
- 2 宇治学

9年間を見通し、地域に根ざした特色ある教育活動による自分の住む地域に自信と誇りを持ち地域に貢献する人材の育成（目標③）
- 3 系統的・継続的な生徒指導と児童生徒への理解

9年間を見通した系統的・継続的な生徒指導による児童生徒の個性の伸長と社会的な資質や能力・態度の育成（目標②）

教職員が児童生徒一人ひとりへの理解を深めることによる個に応じた指導や支援の充実（目標⑤）
- 4 児童生徒交流

児童生徒間の多様な交流活動や地域との交流による豊かな人間性や社会性の育成（目標④）
- 5 家庭・学校・地域が一体となった教育環境

中学校区を単位とした地域・保護者同士の連携を深めることによる家庭・学校・地域が一体となった教育環境づくりの推進（目標⑦）

児童生徒間の多様な交流活動や地域との交流による豊かな人間性や社会性の育成（目標④）
- 6 教職員連携

小学校と中学校の教職員が相互に交流を深めることによる教職員の資質と指導力の向上（目標⑥）

7つの目標

(平成24年度～)

- ① 9年間を見通した系統的・継続的な学習指導により、児童生徒の学習意欲の向上や学習習慣の確立を図り、確かな学力を育成する。
- ② 9年間を見通した系統的・継続的な生徒指導により、児童生徒の個性の伸長と社会的な資質や能力・態度を育成する。
- ③ 9年間を見通し、地域に根ざした特色ある教育活動により、自分の住む地域に自信と誇りを持ち地域に貢献する人材を育成する。
- ④ 児童生徒間の多様な交流活動や地域との交流により、豊かな人間性や社会性を育成する。
- ⑤ 教職員が児童生徒一人ひとりへの理解を深めることにより、個に応じた指導や支援を充実する。
- ⑥ 小学校と中学校の教職員が相互に交流を深めることにより、教職員の資質と指導力の向上を図る。
- ⑦ 中学校区を単位とした地域・保護者同士の連携を深めることにより、学校・家庭・地域が一体となった教育環境づくりを推進する。



1 系統的・継続的な学習指導

【成果】各中学校ブロックに配置しているラーニングコーディネーターが、教職員連携の要として、「学力」の定着向上に向けた重要な役割を担っている。

【課題】全国学力・学習状況調査の教科正答率は上昇傾向にあるものの、依然、多くの項目で全国平均を下回っている。また、児童生徒の主体的な学びをさらに進めることが求められるなか、ラーニングコーディネーターが果たす役割を再確認する等、具体的な授業改善対策が求められている。

2 宇治学

【成果】「宇治学」（総合的な学習の時間）が「地域に根差した教育活動」として、小中一貫教育の大きな柱になっている。

【課題】「宇治学」の推進が、「児童生徒の探究的に学ぶ力の確実な獲得」や「よりよい宇治を築こうとする子どもたちの態度」につながるよう、学習活動の質の向上について検討を進める。ICTの活用頻度の調査において、「自分の考えをまとめ、発表・表現する場面」「児童生徒同士がやりとりする場面」での活用が進んでいない状況が見られる。

3 系統的・継続的な生徒指導と児童生徒への理解

【成果】全国と比べても高い割合で進んでいる小学校と中学校教員同士の連携による、児童生徒への理解と個に応じたきめ細やかな指導が実践できている。

【課題】不登校傾向児童生徒の進学への不安等、様々な課題に対して、どのように児童生徒への理解を深め、きめ細やかな対応ができるよう検討を進める。

4 児童生徒交流

【成果】児童生徒交流の工夫により、中学校への期待の高まりや自己肯定感の高まり、豊かな人間関係の構築につながっている。

【課題】児童生徒交流の取組によっては形骸化しているものもあり、明確な目標や必然性を盛り込んだ取組を考えていかなければならない。

5 家庭・学校・地域が一体となった教育環境

【成果】コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進を基盤とした、地域の実態に応じた家庭・学校・地域の取組が中学校ブロックにおいて広く行われている。

【課題】宇治市においても、地域行事への児童生徒の参加が減少傾向にある等、地域コミュニティの希薄化が進む中、学校を核とした地域づくりについての検討を進める。

6 教職員連携

【成果】小中教職員の親密度の高まりや、実際に行われている交流の内容やその効果、ラーニングコーディネーターの役割の効果が実感できている。

【課題】教職員連携が宇治市小中一貫教育の極めて重要な土台であることを再認識し、より一層、児童生徒への理解や学力の定着・向上につなげるため、教職員連携の質をさらに高めるための検討を進める。

今後の展望

I 「主体的・対話的で深い学び」と「インクルーシブ教育」の一体的な推進に向けて

宇治市では、全国平均と比べても、高い割合で、小学校と中学校教員同士の連携が進んでいます。これまで培ってきたこの土台を、さらに発展させることが重要です。

全国学力・学習状況調査において、主体的に学ぶ児童生徒ほど、国語科の正答率が高いというデータが示されているなど、学力向上の観点からも、児童生徒の主体的な学びを実現させる授業改善をさらに進める必要があります。また、多様な個性や特性、背景を有する子どもが多くなっている現代において、Diversity（ダイバーシティ/多様性）、Equity（エクイティ/公平性）、Inclusion（インクルージョン/受容）の考え方が重要です。これまでの基礎基本の積み上げの上に、今後も引き続き、主体的・対話的で深い学びの一層の具体化に努め、全ての子どもが地域の子どもとして育ち誰一人取り残されない、インクルーシブ教育と一体化し、一人ひとりの意欲が高まり、可能性が開花し、個性が輝く教育を目指します。

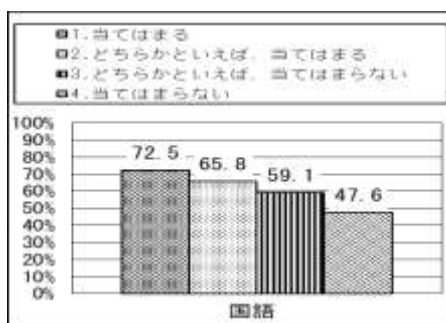
「ふるさと宇治」の状況や特徴、よさや課題について知り、よりよい宇治の姿や将来の自分、自らの生き方について主体的に考え行動する児童生徒を育む「宇治学」は、「地域に根ざした教育活動」として、小中一貫教育の大きな柱となっています。引き続き、「宇治で学ぶ、宇治を学ぶ、宇治のために学ぶ」探究的な学びをとおして、地域社会の一員としての自覚を持って「ふるさと宇治」を愛し、よりよい宇治を築こうとする子どもたちの自主的、実践的な態度を育てていくことが大切であると考えます。

【「宇治市小中一貫教育 12 年間の検証」より】

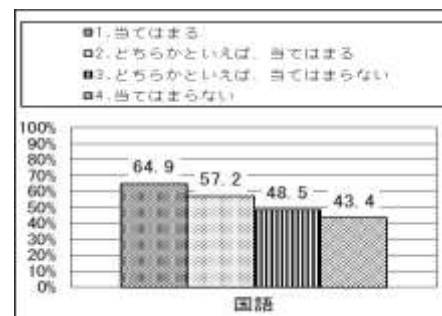
「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか」に肯定的に回答した児童生徒ほど国語科の正答率が高い傾向

※R6全国学力・学習状況調査「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか」の質問調査と国語科の正答率クロス集計

小学校



中学校



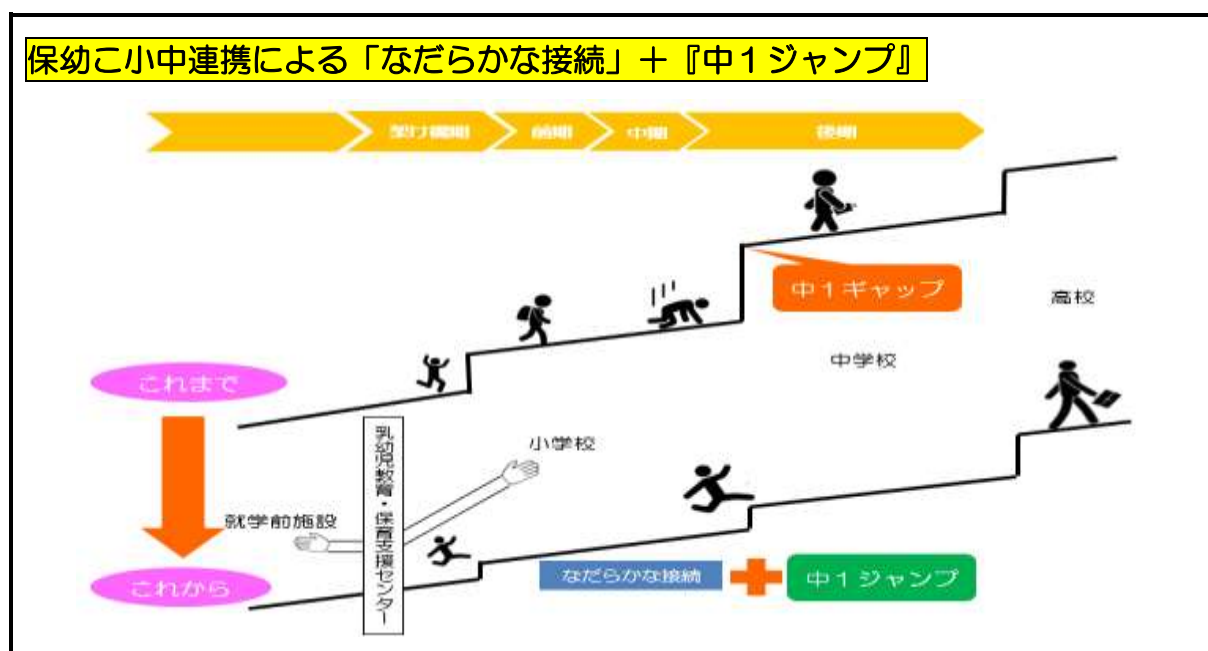
Ⅱ 保幼小連携から小中一貫教育で培う「育ちと学びの連続性」による人づくりに向けて

系統的・継続的な生徒指導を推進していくため、これまでに小中学校の教職員の連携により培われてきた児童生徒への理解の取組を土台として、自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安全・安心な風土の醸成を意識した学習指導と一体的に、多様化する児童生徒一人ひとりの状況に対して機を逃さずに適切に対応を行っていくことが大切です。

小学校6年生から中学校1年生の移行期において、小学校の最高学年としての6年生の役割や、環境が変化することによるメリットにも目を向けることも必要であると考えます。子どもたちの進学への不安にも寄り添い、より効果的な小中連携のあり方を模索していきます。

保幼小中の連携の視点も大切にしながら、単なる情報の交流にとどまらない質の高い小中連携を進め、生涯にわたって、当事者意識を持って自分の意見を形成し、自らの人生を舵取りできる未来の担い手の育成を目指します。

中学校ブロックにおける小学校同士や小学校と中学校の交流活動は、児童生徒の自己肯定感を高めるとともに、豊かな人間関係を結ぶ力の育成に不可欠であると考えます。子どもたちが主体的に取り組み、下級生は上級生の背中を見て学び、上級生はその自覚を持つ交流になるよう、取組の目的や必然性を見つめ直し、ブラッシュアップを図っていきます。



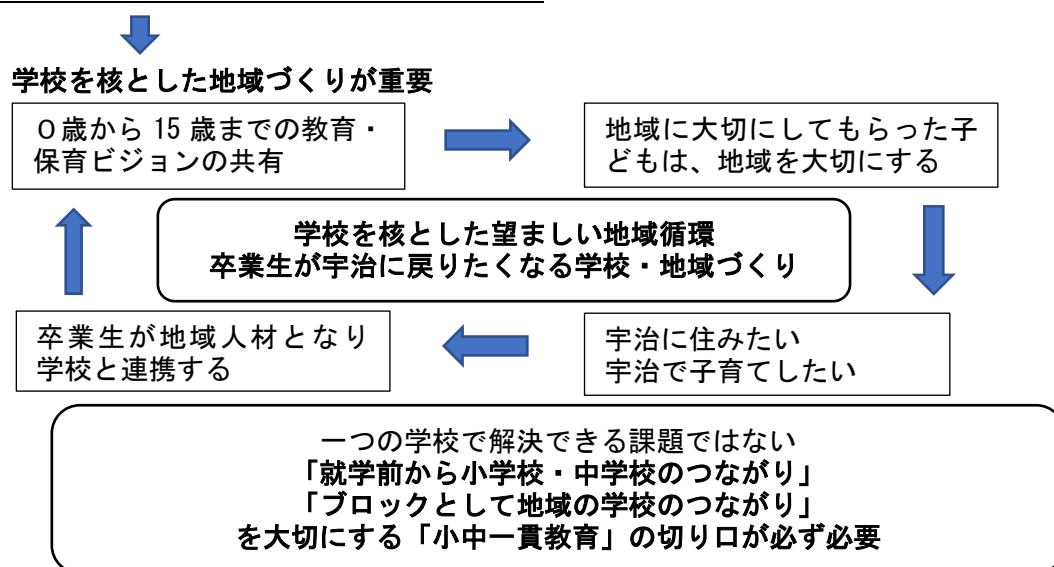
Ⅲ 家庭・学校・地域が協働した取組の推進に向けて

地域コミュニティの希薄化が進んでいる現代において、卒業生が宇治に戻りたくなる学校・地域づくりという「学校を核とする地域循環」という考え方に立った地域づくりが今後ますます重要であると考えます。

そのため、それぞれの地域の資源（良さ・経験・技術等）を活かしながら、「就学前から小学校・中学校のつながり」「ブロックとして地域と学校のつながり」を大切にする「小中一貫教育」の視点を生かした家庭・学校・地域が一体となった教育環境づくりを進めてまいります。

今後も、多様な他者とのつながりやふれ合いを感じながら、地域社会に関わることのできる子どもたちの育成を目指します。

地域コミュニティの希薄化が進んでいる現代



【「宇治市小中一貫教育12年間の検証」より】 ※宇治市小中一貫教育推進協議会での意見より

地域行事に参加する中学生の頼もしい姿が見られた。中学生の活躍を小学校の保護者に見てもらう機会を持つことはとても有効であると感じる。

地域の方が参加する「あいさつ運動」で子どもたちに声かけをした時、大きな声であいさつが返ってきた表情がとても明るく、大変幸せな気持ちになった。家庭も学校も地域も集まる機会は大切にしていきたい。

地域と関わる教育活動により、児童・生徒の豊かな人間性が育まれている。
※R5 小中一貫教育アンケート（学校）



具体的な取組

I 「主体的・対話的で深い学び」と「インクルーシブ教育」の一体的な推進

1 系統的・継続的な学習指導

2 宇治学

6 教職員連携

(1) 小中連携の質の更なる向上

- 各中学校ブロック配置のラーニングコーディネーターを一層活用し、各中学校ブロックの効果的な実践事例を他ブロックに活かす交流活動の充実や、ラーニングコーディネーターの世代交代に備え、より実践的な資質能力の育成をめざした研修の質の向上を進める。

(2) 全ての子どもたちにとって分かりやすく学びやすい、学習者主体の学習環境の創出

- 「主体的・対話的で深い学び」と「インクルーシブ教育」を一体的に推進し、全ての子どもたちにとって分かりやすく学びやすい、学習者主体の環境を整える。
- 全国学力・学習状況調査（小6・中3）や京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～（小4～中3）、宇治市統一学力調査～学びのステップアップ～（小2・小3）等の学力調査の分析力を高め、児童生徒の実態把握につなげるとともに、取組方針やビジョンの共有を図る。

(3) 「宇治学」の一層の推進

- 「宇治学」の推進が、児童生徒の探究的に学ぶ力の確実な獲得につながるよう、宇治学副読本を効果的に活用した学習活動の質の向上を進める。
- 「情報の整理・分析」「まとめ・発表」時のICTの効果的な活用を進め、児童生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指す。
- ラーニングコーディネーターを核として、課題解決型の学習をとおして、教科学習とも連動した「宇治学」における児童生徒の「主体的な学び」づくりを推進する。
- 「宇治学」による探究的な学習のさらなる深化を進めるとともに、引き続き、地域社会の一員としての自覚を持って「ふるさと宇治」を愛し、よりよい宇治を築こうとする子どもたちの自主的、実践的な態度を育む。

【「宇治市小中一貫教育12年間の検証」より】

ICTの活用頻度（週3回以上の割合） ※R6全国学力・学習状況調査 学校質問
(%)

項目	区分	小学校	中学校
自分で調べる場面	宇治市	77.3	100.0
	全国	76.6	67.4
自分の考えをまとめ、発表・表現する場面	宇治市	63.6	70.0
	全国	55.1	51.9
児童生徒同士がやりとりする場面	宇治市	50.0	60.0
	全国	45.0	41.1

II 保幼小連携から小中一貫教育で培う「育ちと学びの連続性」による人づくり

3 系統的・継続的な生徒指導と児童生徒への理解

4 児童生徒交流

6 教職員連携

(1) 小中教員の日常的な連携による児童生徒への理解

- 小中教員の日常的な連携により、児童生徒への理解を一層すすめて、多様化する児童生徒の背景にある要因（ヤングケアラー・貧困・発達課題等）に焦点をあてたアセスメントを進め、多角的・多面的な児童生徒への理解に基づく適切な支援を行う。
- 学習指導と生徒指導を9年間で一体的に積み上げられる点を生かし、生徒指導の実践上の4つの視点を生かした授業づくりを推進し、切れ目のない支援を行う。

(2) なだらかなつながりと環境の変化によるメリットの両方を大切にした接続

- 前期・中期・後期のステージにおける目標やアプローチの仕方、それぞれのステージで身に付けるべき社会性を再確認するとともに、特に、小学校6年生から中学校1年生へのつながりについては、「『中1ギャップ』から『中1ジャンプ』へ」としての視点を持ち、節目として位置づけられる取組や、変化を前向きに捉えられるような取組などにつなげられるよう児童生徒への理解を進める。

(3) 就学前の育ちや学びを活かした小中一貫教育との連続した学び

- これまでの前期・中期・後期に、乳幼児教育・保育支援センターとの協働により、5歳児と小学1年を「架け橋期」と位置付けて、架け橋期の共通プログラムの作成等により、乳幼児期から中学卒業までの目指すべき姿を共有し、保幼小中連携を推進する。
- 就学前の育ちや学びを活かして、小学校の学びへのなめらかなつながりを進め、就学前児童との交流活動の実施や、授業参観・保育参観等を通じた教職員同士の交流など、就学前施設との連携を強化する。

(4) 児童生徒の主体的な交流活動

- ブロック校長会や小中一貫教育コーディネーター会議を中心として、ブロック全体で取組の目的や必要性を熟議し取組を精査していく。ビジョンを共有し、継続できる取組にしていくことで、形骸化を防ぎ、児童生徒の主体的な交流活動へとつなげていく。
- 6年生体験入学時の中学生からの発表や児童会・生徒会での取組など、オンラインも活用しながら、実際に交流する場面を工夫する。
- 分散進学が発生する学校においても小中一貫教育を推進するとともに、解消にあたっては通学の安全、地域コミュニティ等に配慮した上で、手法や時期を検討する。

Ⅲ 家庭・学校・地域が協働した取組の推進

5 家庭・学校・地域が一体となった教育環境

6 教職員連携

(1) 「コミュニティ・スクール」による小中連携を推進

- CSコーディネーターが核となって、「コミュニティ・スクール」による中学校ブロックを意識した小中連携を進める。更に、中学校ブロックの取組を共に推進する等CSコーディネーターの連携も密にしていく。
- 学校運営協議会等を活用し、保護者・地域とともに目的や必要性を熟議し取組を精査する。
- 学校を核として、教育委員会、福祉やまちづくり、共生社会、安全、防災といった、行政の多様な部局が連携・役割分担し、家庭・学校・地域が一体となった教育環境づくりを進める。

(2) 「児童生徒の活動」「家庭・地域との協働活動」への主体的な参画や気軽な参加の創出

- 協働の視点として、win-win(お互いにプラス)の視点を大切にする。
- 保護者や地域の役割や責任を明確にしつつ、ゆるやかにつながる関係を大切にしていく。
- 「学校だより」だけではない情報発信のツールを充実させる。学校、教育委員会、地域、それぞれができる方法を考え、受け手にとって意義のある情報発信を進める。
- 「保護者や地域の方の主体的な参画かつ気軽な参加」を促し、学校・地域の文化として継続できる取組にしていく。

地域と学校の協働活動の例

安全・安心づくり	登下校の見守りボランティアを組織化	読書活動推進	図書ボランティアの活動「選書会」「読み聞かせ」「図書室整備」
	登校時の見守りを兼ねたラジオ体操の実施		田植え体験 茶摘み体験
	土曜の居場所づくり		林間学習での火おこし指導、カレー作り
	放課後の遊び場づくり		生活科(昔遊び、折り紙)
地域の取組	ペルマーク仕分け作業の地域ボランティアの組織化	特別な体験	赤ちゃん体験
	小中合同の地域懇談会		浴衣の着付け
防災	防災イベントへの児童生徒参加		プログラミング教室の運営
環境整備	校内年末清掃	特別な体験	職場体験学習の開拓活動
	園芸ボランティア		授業支援(家庭科・図工)
	花壇、花作りの環境整備		家庭科(裁縫、ミシン、調理実習)の支援
地域行事への参加	地元のお祭りへの運営参加	日常の連携	クラブ活動(囲碁、将棋、卓球)の支援
	クリーン運動		校外学習での付き添い支援
	福祉バザー		縄跳びのカウント補助
	「しめ縄づくり」「左義長」		あいさつ運動

令和5年度アンケートより